

## クロマダラソテツシジミの斑紋異常型について

砂川博秋

〒906-0011 沖縄県宮古島市平良字東仲宗根添 1166-287 宮古島市総合博物館

クロマダラソテツシジミ *Chilades pandava* は、台湾、フィリピン、ボルネオからインドにかけて分布する（白水 2006）。これまで沖縄県内での発生記録は少なかったが、2007年に、沖縄県各地で本種の発生が確認されている（砂川・鴨川、2008を参照）。筆者は宮古島におけるクロマダラソテツシジミの発生調査中に、本種の斑紋異常型（1♂）を採集したので報告しておきたい。

採集データ：1♂、2007年7月21日、宮古島市腰原、砂川博秋採集（写真1，2）

この個体の斑紋は別種に見えるほど異なっている（写真1，2）。特に、翅の裏面の斑紋が顕著に異なっている。翅表（写真1）の外縁の黒帯は、前翅・後翅とも正常な個体（写真3）に比べ、幅が広く、後翅肛角部の黒紋がうすい。正常型の翅の裏面後翅外縁部には白で縁取られた、明瞭な5個の黒紋があるが（写真4）、本個体は縁取り無しの黒紋が3個しかない（写真2）。また、正常型では前翅・後翅とも裏面の地色は薄茶色で白い波模様があらわれるが、本個体では翅脈以外は白っぽく、外側に薄茶色の帯があらわれている。さらに本個体は、後翅基部近くにある黒紋が正常な個体に比べて大きいなどの違いがある。

なお、異常型についてご教示いただいた比嘉正一氏にお礼を申し上げる。

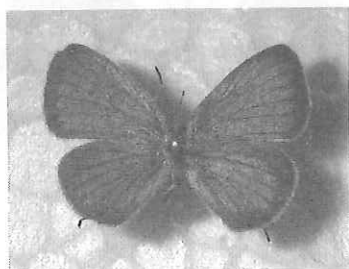


写真 1 異常型♂ 表

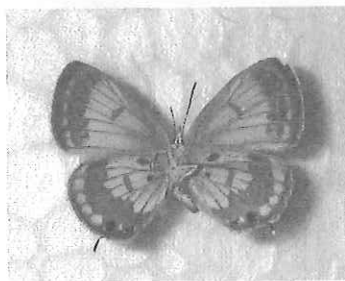


写真 2 異常型♂ 裏

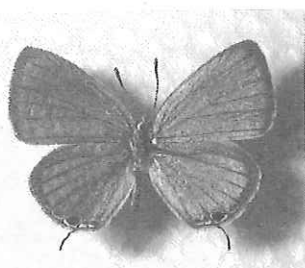


写真 3 正常型♂ 表

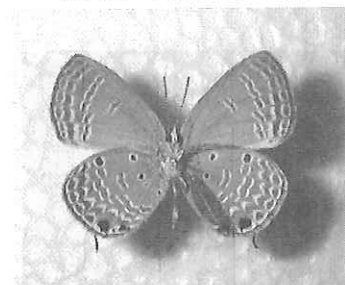


写真 4 正常型♂ 裏

### ○引用文献

砂川博秋・鴨川正道 2008 宮古諸島におけるクロマダラソテツシジミの発生. 宮古島市博物館紀要, 12号: 81-85

白水隆 2006 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社

学教授で、日本語学会に所属して調査に参加した柴田教授の「宮古方言の研究とその意味」と題する論考は、初年度の報告「24」に収録され、講演や「寄稿」に至る背景を詳細に整理、展開しておられる。

九学会連合の沖縄調査に日本語学会は柴田教授ら六人が参加、二年間宮古のみを集中的に調査研究している。調査に当たって宮古方言を取り上げる理由を三つあげておられる。要旨は次のとおりである。

第一の理由 宮古方言は言語構造の点で、沖縄本島、八重山と鼎立する一大方言である。基礎語彙二三五語の三者の異同、隔たりはまったく言っていないほど同一であり、三方言はそれぞれ三角形の頂点を占めるような関係にある。音韻の面からは、宮古方言は他の二方言が持つ音素を持たなかったり、他の二方言が持たない音素を持っていたりして、宮古方言と首里・八重山方言という対立が見られる。

第二の理由 日本語の古語をよく保存しているということもさることながら、日本語としておそらく最も変転を重ねた方言であるということである。この方言の研究によって、日本語の変化の可能性の極限を見ることができるようになる。

第三の理由 首里方言については『沖縄語辞典』（国立国語研究所・一九六三年）があり記述的研究も少なくない。八重山方言についても、八重山諸島各地の方言を集めた『八重山語彙』（宮良当杜・一九三〇年）があり、記述的研究もいくつあるのに、宮古方言については、これらに匹敵する辞書も研究もない。

とくに理由一、二については、具体的事例をあげて論究し、今回の調査を通して、「宮古語彙の完全記述」をめざしていると記している。

さきの「宮古国の宮古語」のなかでは、理由一を「沖縄と宮古の違いは、沖縄と八重山の違いに等しく、また、宮古と八重山と

の違いにも等しい」と記している。また、「宮古では、八重山のほうが沖縄に近いということをよく聞かされた。おそらく、それは発音やアクセントのことであろう。正三角形の関係というのは、単語が同じ語幹を持つているかどうかということについて調べた結果出て来たことである」とも記している。

さらに方言は「なぜ、こんなにも変わってしまったのか」、その理由について「天候でもなく、人種でもなく、性格でもなく、一に、交通のせいなのだと思う。離島という地理的条件が交通をばんだために、それぞれの土地で思い思いに日本語を発展、変化させたのであろう」と明記しておられる。

先の新聞の訃報記事には、「国語研究所時代に手掛けた『日本語地図』や、新潟県糸魚川地域の方言を調査、分析した『糸魚川言語地図』など、現地調査を基にした詳細な研究で、日本の方言学、言語地理学、社会言語学の発展に尽力した」「ユニークな説明文で注目された『新明解国語辞典』や、ベストセラー『知ってようで知らない日本語』など一般向け日本語解説書をはじめ、テレビでも日本語の知識や面白さを説き親しまれた」とも記されている。

このような言語学界を代表する著明な学者の見解につづけて記すのは不遜のそしりは免れないが、日本語（方言）の発展、変化は「離島」という四面環海に閉ざされた地理的条件に加えて、近世人頭税制による閉鎖社会が島ばかりか村（現行字）ごとの方言をいっそう変化させた、と考えている。

柴田武教授の日本語圏全域を視野に入れた該博な言語知識、方言研究のなかで、宮古方言はその後どのように深められていたのであろうか。遅ればせながら心からご冥福をお祈りするものである。合掌。

（なかそね・まさじ）